

木原武一著「天才の勉強術」新潮社 1994年6月1日刊を読む

## 天才の学び方(8) チャップリン



- ・最近の日本のテレビなどで見うけられるお笑い番組のギャグのほとんどはチャップリンの真似である。
- ・人間はいつも同じようなところで笑っている。人を笑わせるコツは今も昔も変わりが無い。そして笑いには国境がない。チャップリンの映画は、アメリカやヨーロッパはもちろんのこと世界の各地の人々を等しく笑いにさせることができる。そしてそれ以上のこともできる。「人を笑わせながら、ものを考えさせる」のである。
- ・1930年代から40年代につくられた「街の灯」「モダンタイムス」「独裁者」「殺人狂時代」は笑いの中に思考があり、思考が笑いを奥深くする映画である。
- ・「映画の目的は笑わせることだ。しかし、その中には20世紀の時代に通じるシリアスな内容が含まれている」(チャップリン)
- \* 「シリアスな内容がある」とは、人びとに今まで気がつかなかったことについて考えさせるということである。笑いだけでなく、そういうものがあるからこそ、チャップリンの映画は忘れがたい印象を残す。まだ観たことがないという人も一度でもチャップリンの長編映画を観ればそういう感じを抱くにちがいない。
- ・チャップリンは20代のはじめころ、ショーペンハウアーの「意志と表象としての世界」を読み始め、それから40年間、何度か読み始めてはやめ、まだ最後まで読み通してはいない。「人生とは苦悩であって人間はこれに耐えて生きていくしかない」と達観した哲学者、ショーペンハウアーの著書で、チャップリンは中断しながら40年間も手元に置いて折に触れて読んでいた。
- ・チャップリンは、人知れず本を読み、並なみならぬ勉強をしていた。
- ・ショーペンハウアーによると、「笑い」は「ある概念とそれから類推される現実との不一致から生まれる」という。「あるものが本来そなえているものとまったく異なる役割や機能を帯びるようになる」。
- ・1916年の「チャップリンの消防士」では、消防車のタンクの栓をひねるとコーヒーが出てくるという場面がある。ほとんどの人は、この場面で笑うはずである。「火を消すための装置」というのが消防車の「概念」であるが、これがコーヒーメーカーという「現実」となってあらわれ、その「不一致」に人びとは笑うのである。
- ・1918年の「犬の生活」には、「犬の尻尾がドラムをたたき続ける」場面がある。ここでも「犬の尻尾」という「概念」が、「一本の棒」という「現実」に変身している「不一致」が笑いを誘う。
- ・ここで表現されているのは、哲学的に言えば「概念」と「現実」の「不一致」ということになる。チャップリンはショーペンハウアーの「理論」をもとに「笑い」の場面を考え出したということも大いに考えられる。
- ・チャップリンの映画の基本となるのは、例のあの山高帽と口ヒゲ、やぶれた窮屈な上衣、ダブダブのズボン、大きな靴、自在にまたがるステッキ、そして、爪先を外向けに向けたアヒルのようなスタイルである。このトレードマークとなったスタイルは、すでに1914年、2本目の映画から登場。はじめは、とっさの思いつきから生まれたものだという。それ以来、「モダンタイムス」

にいたるまで、約 20 年間、彼はこの同じスタイルでスクリーンにあらわれ、そのいつも変わらぬ浮浪者の姿を目にするだけで観客は笑いに誘われた。

- ・チャップリン本人の言うところによると、彼の笑いの基本は、例の爪先を外側に向けたアヒルのような歩き方にある。映画俳優になったチャップリンは、いつも歩き方のことばかり考え、来る日も来る日も練習して、どんなときでもその歩き方をすればまちがいに「笑いがとれる」ようになった。
- ・〈大きな鏡の前であの歩き方を練習しているチャップリン〉を思いうかべると、何だかそれだけで笑いがこみあげてくる。
- ・映画の中では、ほとんど笑顔を見せないチャップリンも鏡に映る自分の滑稽な姿には思わず腹をかかえて笑うこともあったのではなかろうか。
- ・世の中には貪欲に知識を求める人間がいる。私もその一人だった。ただし動機から言うと、私は知識欲から求めたのではなく、ただ、無知な人間に対する世間の侮蔑から身を護るためにそうしたのである。そんなわけで、暇さえあれば古本屋漁りをしていた。
- ・動機はどうあれ、彼の読書範囲は大学出身の知識人などにけっしてひけをとらないほどのものである。彼が自伝であげている著者や書名をリストアップしてみると、

〈文学の世界〉では、

- ・シェイクスピア
- ・ウィリアム・ブルーク
- ・ディケンズ
- ・マーク・トウェイン
- ・ホイットマン
- ・ラフカディオ・ハーン
- ・ジェイムズ・ボスウェル
- ・モーパッサン など(シェイクスピアは全部読んだという)

〈哲学〉では、

- ・ショーペンハウアーのほかに
- ・プラトン
- ・カント
- ・ロック
- ・エマソン
- ・ニーチェ
- ・ベルクソン など

〈その他〉では、

- ・フロイト
- ・プルタークの「英雄伝」などもあり
- ・「千夜一夜物語」は愛読書だったという。

- ・また、莫大な資産の所有者として経済学にも関心をもっていて、たまたま読んだある経済学者の理論に共鳴して手持ちの株や債権を売り払い、1929年の大恐慌の被害を免れた。
- ・幼いころのチャップリンは歌手で母親の歌をいつも耳にするなど音楽的環境にはめぐまれていた。少し大きくなってからは何時間もピアノの前に坐り、弾きながら作曲などしていたという。
- ・16歳のときチェロとヴァイオリンを手に入れ、巡業先の劇場の指揮者に教えてもらい、一日に何時間も練習するほど音楽に熱中した。彼は左ききなので、弦を逆配列に張りかえて弾いた。



Flute Concerto D dur (K.314)  
1st movement Cakiza W. A. Mozart  
(written by gito)



- ・チャップリンがユニークなのは、臆することなくみずから映画音楽もつくってしまうところだ。チャップリンは、楽譜が読めないのに、当然、楽譜を自分で書くことはできない。しかし、彼の頭の中には、映画の場面に合わせて次々と楽想がうかんでくる。彼がそれを口ずさみ、あるいはピアノで弾くと、助手として雇った専門の音楽家が、それをすばやく楽譜に書きうつし、伴奏をつけたり、編曲したりして曲ができあがる。
- ・彼は映画づくりのすべてを自分でやりたかったのである。それが映画界に入ったばかりの頃からの彼の目標だった。「私はあらゆる機会を利用して、映画事業について勉強することにした。だから、現像所や編集室にもせいぜい出入りして、どんなふうにして切ったフィルムをつなぎ合わせるか、よく注意して観察していた」
- ・撮影所で毎晩おそくまでがんばるのは、チャップリンだけだった。他人の芸までよく見ていた。ほんとうに恐ろしいほどの勉強家だった。
- ・特に重視していたのは「子供の反応」。「子供を喜ばすことが、世界中でいちばんむずかしいんだ」と考えるチャップリンは、「笑いをとる」つमりの場面で子供たちが笑わなかったりすると、撮り直しをすることもあった。
- ・チャップリンほど謙虚に観客に学ぶ映画監督もめずらしい。これが、すべてを完全に仕上げないではいられないチャップリンの流儀だ。
- ・「撮り直しが多い」ことではチャップリンは有名だった。
- ・完璧主義とは、細部に徹底的にこだわることである。役者の演技について、すべて自ら演じてみせて、その通りに演ずるよう指示。
- ・新作の準備に取りかかると、登場人物の特徴や重要な場面の所作を自ら演じて、それを秘書があらかじめ決められている符号によって詳細に記録した。
- ・「人間から新しい能力を引き出すのが本当の教師」だとしたら、チャップリンは(役者やスタッフに対して)そういう教師でもあった。
- ・「よく学んでこそ、よく教えることができる。よく教えることができるためには、あらかじめ明確なイメージと奇抜なアイデアが用意されていなければならない」
- ・「アイデアというものは、それを一心に求めてさえいけば必ずやってくるということを発見した」
- ・「たえず求めているうちに、いわば心が、想像力を刺激するような出来事を見張る一種の物見やぐらになってしまうのである、一片の音楽、一夕の日没からアイデアが生まれることもありうるのだ」
- ・「あなたの心を刺激する対象をとりあげて、それを追求し、掘り下げる。もしそれ以上に発展しそうでないと思ったら、諦めてほかの対象を探しなさい。たくさんの中からひとつずつふるい落としてゆくことが、望むものを見つけ出す近道なのだ」
- ・「では、どうやってアイデアをつかむか。それにはほとんど発狂一歩手前というほどの忍耐力がいる。苦痛に耐え、長いあいだ熱中できる能力を身に着けねばならぬ」
- ・「モダンタイム」…機械の世界の中で翻弄されたひとりの男が自分を取りもどすために悪戦苦闘するという第一級の文明批判の映画。
- ・これはただ笑いころげて観ていけばよい映画ではないこと、そして歯車の中でもがく主人公は自分たちの似姿にほかならないことに気付く。

